

「ジュリアン」物語

1994年5月中旬我家にとても元気な男の子がやって来た。息子が長年待ち望んでいたコリー犬である。

生後1ヶ月半のなんとも愛らしい小犬です。名前は「ジュリアン」息子の洋平が名付け親である。その日からの毎日は忙しく1日24時間があっという間に過ぎていく。何をしても可愛いのです。お陰で明るく楽しい家庭にしてくれました。ジュリアンは息子の教える事をどんどん覚えていくのです。追っかけっこが大好きで追いかけてたり追いかけられたり、息子が立ち止まり音を立てないようにはしっているとジュリアンも立ち止まり耳を澄ませて考えているのです。そしてソーッと反対廻りをし鉢合わせになった息子を驚かせ喜ばせている。「ジュリアンには負けたヨー。」抱き寄せる。褒められているのが解るのか息子の顔をペロペロ舐めるのです。息子が出掛ける支度を始めると、何かくわえてきて「追いかけて来て」というふうに逃げる仕草をするのです。どうも息子を引き止めているよう。仕方がないなあと言いつつ相手をしています。そして「お留守番」と言われ息子の姿が見えなくなるまで見送っている。犬の視力は弱いと聞くがどうも良く見えているように思う。

そういう和やかな日が続いていたところへ「ウルサイ、迷惑だ」という内容の投書が2度入る。なぜかある方にだけ吠えるのです。そのうち怒鳴られるようにもなりました。夫がSさんに相談する。その方は「タックとアレックス」という名の犬を飼っておられる。知り合いの訓練所で飼われていた父犬に一匹しか子供ができなかったのと一緒に譲り受けたそう。

そのSさん御夫婦と2匹の犬、家からは夫・息子・ジュリアンでその訓練所のある「大阪府和泉市SBドッグスクール」へ見学に行く。所長に会って来る。「この子は自分が人間だと思っているから上下関係を教える為にも早く預ける方が良い」と言われた」と私に報告する。紹介者のSさんは「攻撃の訓練を含めて半年だから4ヶ月でいいんじゃない?」「預ける時は一緒に行って4ヶ月でと頼んであげますから」と奥さんは息子に言ったそう。

1995年5月14日。息子の気持ちを思うと胸が張り裂けそうになる。生後1ヶ月半で我家に仲間入りしたジュリアンの面倒をそれはよく世話をした。息子は理想の父親になるだろうと感心するほどだった。同じくらいジュリアンも辛い。車中フーフーフと溜め息をつく。どしゃ降りの中、堺方面に向かって走る。途中ハンドルを持っている夫に「ジュリアンの涙雨の様な気がする。もう行くの止めよう。引き返そう」と頼むが「バカなこと言うな」と怒鳴られる。約束の時間よりも早く着いてしまう。担当の女の子岩田さんに出迎えられる。4ヶ月で卒業させて欲しいと言ってみるが「規定だから」という返事。血統書を求められる。コピーと両方用意していた夫がコピーを出すのだめだという。「コリークラブで訓練所を卒業したという証明印をもらうため」と答える。何故初めに必要なのだらう。半年も先のことなのに何故?と疑問に思うが大事なジュリアンを預けていくのだから相手の気分を害してもと、それ以上尋ねるのをやめる。そしてシワーつない血統書を筒から出して渡す。1ヶ月後から月に1~2度面会出来るとのこと。前もって電話をして欲しいと。ドイツチェーンに付け替えられ犬舎へ。我々は訓練所を出る。ジュリアンの鳴き声が聞こえる。

1ヶ月後の6月中旬。面会に行く。犬舎から出て来たジュリアンは私達のことが解らないのかキョトンとしている。ジュリアン、と呼ぶと尾を振って走って来ようとするが、リードを引っ張られ動けないでいる。側に寄って抱きしめる。元気なのでホッとした。30分程一緒に過ごす。

2ヶ月後。元気なジュリアンに会う。初めて一緒に訓練を受ける。私は自信がないので、夫と息子交互に教わる。「付け、後へ」犬が集中出来るのは15分が限度だと教えられる。あとの15分程追っかけっこをして遊ぶ。ジュリアン犬舎へ。泣き声を耳にしながら訓練所を出る。

2ヶ月半後。「付け、後へ」今日は私も加わる。15分後自由時間。そしてジュリアン犬舎へ。中に居る子達(60匹以上預かっているとのこと)が一斉に吠え始める。岩田さんの「ウルサイ」という大きな声に驚きながら訓練所を後にする。

3ヶ月後。ジュリアンは元気だけどずい分痩せている。齒茎から出血している。どうしたんだろうかと岩田さんに尋ねるが何も言ってくれない。夫に一度連れて帰ろうというが、「そんな事出来ない」と言って怒鳴られる。変わってきているジュリアンを見て気にならないのだろうか。この頃から預けている事が不安になってきた。

3ヶ月半後。元気だけどどう見ても痩せている。具合は悪くないのだろうか。岩田さんは側にいるのだが教えてくれない。頼んでみるが自分達で練習してくれという。訓練士どうして雑談を始める。ジュリアンも私達も身の置き場がなくて困った。嫌な気分が訓練所を後にする。この頃からジュリアンで連れて帰らなければというも思うようになった。夫に言うのと紹介してくれた人の手前できないと言う。自分のことしか頭の中になのか?紹介して下さった方もきっと解って下さると思う。どうしようもなく不安な気持ちで半月が過ぎる。

4ヶ月後。だんだんおとなしくなってきたのか元気がなくなってきているのか以前の活発さが無くなってきたように思う。岩田さんに「自分達で練習してくれ」と言われる。「自信が無いので手本を見せて下さい」と頼む。何故か迷惑そうな顔をしている。そして同じことの繰り返し。約束の半年迄時間はそう残されていないのに大丈夫だろうか。60匹以上預かっていると言っていたので、毎日は無理だと解るが、どうも練習されていないように思う。ジュリアンが戸惑っているのだ。これでは預けている意味がない。又夫にしつこく言うのが聞き入れようとしな。何か変だと思わないのだろうか。

5ヶ月後。ジュリアンがハッキリと解るくらいに痩せている。一日一回の食事だと聞かされていたのでそのせいかも。岩田さんに立ったままじっとしている姿勢を教えて欲しいと頼んでみる(耳を触られることを嫌がって診てもらうのに苦労し

ていたから)が、「まだ早いですヨー。そんなに焦らなくても」との返事。

そういえば預けて間もない頃、広島から来ているという御夫婦がいた。奥さんとレトリバーが練習を始める。「後へ、付け」と命令されるが出来ない。その内暴れだした。その横でご主人が所長に言っている。「半年が来たので、今日連れて帰ります」と。所長は「まだ無理ですヨ。もう少し預りますから」と引き止めている。遠くから来ているのに大変だなあ、と同情したことを思い出した。

あと1ヶ月で卒業だというのに。計画は立てられていたのだろうか。私達の気持ちを察したかの所長と何か話し始める。所長が寄って来て「フセ、ハウス」の手本を見せ教えてくれる。

5ヶ月半後。所長が訓練するという。手本を見せる。粗っぽいと感じる事が何度かあった。「ハウス」の命令で箱に入るが窮屈で足が出てしまう。するといきなりジュリアンの鼻に石の入ったカンを投げ付けるのだ。それを拾いもう一度打ちつけるのだ。用意していたビデオを準備し始めると投げるのを止めた。お腹を蹴ったり背中を叩いたり。これが訓練だろうか?もっと恐怖を感じ始めた。「フセ」が遅れると後首を叩いて見せるのだ。思いつきりショックを与えろと又叩く。人間ならばムチウチ状態だ。自分よりも一寸でも先に出ようものならドイツチェーンを思いっきり強く引き上げる。喉は大丈夫だろうか。この人のすることは虐待ではないのか。犬の集中力は15分と言っていたのに1時間以上も続く。もうジュリアンも私もパニック状態だ。ジュリアンが「キューンキューン」と鳴き始めると大きな声で「ウルサイ」と又叩くのだ。もう止めてくれと言いたい気持ちを押しさえる。出しゃばると、この人はジュリアンに自分の感情をぶつけようとするので恐ろしい。今日だけはどうしても連れて帰ろうと夫に耳打ちするが又聞き入れてくれない。5ヶ月間もいったい何をしていたのか。何を今ここにきてムキになって1時間も訓練するのか。預けていることが無駄に思う。参ってしまったこの子を置いて帰れない。

夫は私の気持ちを察したのか「来週が半年になるので迎えに来ます」と言う。「その日は出張で留守だから3週間後にしてくれ」とも付け加える。それから毎日のジュリアンのことが気になって仕方がない。長い3週間が過ぎ、迎えに行く。訓練所に付くと、ジュリアンに会う前に訓練の成果を見せるからと主任

